



Title	The Cenci について
Author(s)	神保, 菰
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 4, p. 43-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

The Cenci について

神 保 菰

The Cenci は1819年8月に書き上げられ、9月に先ずイタリアの Livorno で、翌1820年3月半ばには英国で出版され、その時この作品は可成りよく売れ Shelley がそれまでに発表したどの作品よりも多くの批評を受けた。the *Examiner* は「明らかに当代で最も偉大な劇作品であり、すぐに第二版が出るだろう。」^①と言ひ、the *Theatrical Inquisitor* は「第一級の劇の力作として『チエンチ家』は劇に与えられるあらゆる特質の美しきで並ぶものがない……」^②と激賞している。これに反して the *Literary Gazette* は「知的墮落と詩的無神論が現代に生み出すあらゆる忌むべきものの中でこの悲劇は最も忌むべきと思われる」と冒頭で述べた後、これは人間が仲間を満足させるために作ったものではなくて、地獄の鬼をもてなすために悪霊が作ったものの様に見える位だとさえ言ひて不敬^③と不道徳を鋭く非難している。他に the *Monthly Magazine* はじめ数種類の雑誌はいずれも Shelley の詩人としての天才は認めながら題材が余りに恐ろしいとか忌むべきという事を指摘している。

The Cenci で最も目立つ事は抒情性の欠如である。表現様式では Shelley の他の詩に見られる様な華美な叙述的表現や比喩的表現は余り用いず内容も他の作品の様に美しい空想の世界ではなくて、愛情と憎悪と悲哀が織りなす激情の世界なのだ。これは Shelley がこの作品を書くに当って一般に理解され広く親しまれることを願ひて自分の主義主張を強く打出さなかつたためと、劇であるから上演時の効果を考え観客を真に共鳴させるためには言葉を出来る丈日常用いられているものに近づける必要が生じたからである。^④当時、劇の観衆に最も好まれたものはメロドラマや茶番劇で芸術的価値の高いものは要求されなかつた。従つてロマン派の詩人が劇を書く場合には、当然の結果として彼等の imagination を自在に働かす事を控え、内容、表現共に観衆の好みに合わせるため、本来の才能を発揮出来ないままに終つた。Coleridge, Wordsworth, Byron, Keats

にはそれぞれ一二の劇作品があるが、主人公の性格は真剣さを欠き文学的価値は余り高く評価されていないようだ。^⑧ こうした過ちを避けるために Shelley は題材として純粹に悲劇的な物語を選んだ。そしてこの試みの成否に非常な興味を持ち大いに期待している旨を、この悲劇が大方出来上った頃 Thomas Love Peacock 宛の手紙で語っている。「私は今のところ次の様な期待を根拠に、切に成功する事を望んでいます。それは、この悲劇が作品としては *Remorse* を除けば今までに演ぜられた現代劇のどんなものにも確かに劣らないものだという事、その筋の興味は信じられない位、他の現代劇よりも崇高で真に迫るものだという事、そして、比喩的表現に於ても感情に於ても大多数の人々が理解して満足する事しか書いていないという事です。」と、上記の様な攻撃的となる点も勿論あり Shelley の他の作品と異なる点は今述べた通りだがそれでもこの作品の根底には何か Shelley 独特の崇高なものがあると思う。主な登場人物三人の性格を見た上で彼等がある一つの方向に行動して悲劇を進展させている事、及びその中に織り込まれている Shelley の意図を明らかにしたい。

Count Cenci は恐ろしく残虐性を帯びた人物で、その放蕩を極めた青春は無法かつ墮落したもので、成長するにつれその暗黒の世界から脱出するどころか、益々暗黒の中へ入って自暴自棄で残忍な壮年時代を経、頭に霜をおく老年に至っても尚罪多い日を送っている。莫大な財力のお蔭で、罪のため奪われる筈の生命を三度も救われて来ている。そして彼は肉慾に耽り快樂を追求した若い間は幸せだったと自ら述懐している。年を経るに従ってこの甘い享樂には飽き、人を殺しその苦悶の声に快感を覚えるがそれにも満足出来なくなった今は人の魂の苦しみを楽しむようになる。そして人を苦しめるこの悦びの対象が肉親に集中されて来る。肉親に対する憎悪は餓死を願ってスペインに送った息子二人の死を神に祈り、末の息子 Bernardo 及び後妻で継母の Lucretia には死んで地獄へ落ちることを祈り、末娘 Beatrice の処置は「黙々たる空気にも聞かれる事を恐れる」とその恐ろしさを暗示している。Cenci のこうした残忍性は全く生来の異常な性格に他ならず、スペインへ送った息子についての祈りがきき届けられた時、祝宴を開いて列席の貴賓の前に語る狂喜の言葉は読む者の目を覆わせる。

神よ、

ありがたい！一夜の中に、なぞのような方法で、
俺の求めることを成し遂げてくれた。

あの親不孝で始末におえぬ息子が死んだ！

——そうだ、死んだのだ！……

俺と一緒に喜べ —— 俺の胸は不思議にわくわくする。

(I. iii. 40—4, 50)

このような忌むべき恥辱に満ちた行為は自分の喜びのために行くと同時に余生幾許もない我が身の為すべき義務であり、その義務が終れば財宝を焼尽し自分の魂は神に渡してよいと考える。自分は悪の代表で、闇を求める者である事を認める彼の目的は秩序あるものを破壊し、光明を暗黒に融合させる事だ。そのために彼が狙うものは善と美の代表者 Beatrice の魂である。何と知的かつ悪魔的な罪悪だろう。ぎらぎら輝く太陽を眺めて、彼は己れの目論見を独白する。

闇よ、来い。だが昼だって何だ。

夜と昼を混同しようとする行為をやつてのける俺が

一体何のために夜をのぞむのだ。

人を狼狽させ恐怖の霧の中を手さぐりするのは、彼女だ。

たとえ空に太陽が出ていても、彼女はその光を眺める勇氣も

その暖かさに触れる勇氣もないのだ。それなら彼女に夜をのぞませ

ればよい。

俺の考えている行為によって俺のために程なくすべてのものを

消滅させるのだ。俺は地の陰よりも、無月期の空よりも、

最も暗い雲の中に消える星座よりも、

暗く恐ろしい心の陰うつさをもっているのだ。

その闇の中を俺は目的に向って安全に人目につかずに、

進むのだ。—— その目的が果されるといいのだが。

(II. i. 181—94)

この目的達成のため 'incest' によって Beatrice を狂乱させた後彼女の意志を納得させて、魂を墮落させる事を願うが説得し得ず、呪詛による成就

を望む。天使の様に美しい身体のすべての部分をそれぞれ目を覆う様な恐ろしい姿にし、子供を産めばその子は身心共にぞっとする程邪悪で醜悪な片端者にしてくれと神に祈る。

この様に Cenci はその力に於て並ぶ者が無い「悪魔」に仕立てられている。その力は財力と知力と精神力だ。黄金は「この老人の剣」である。この劇の初めでも広大な領地を教皇に提供して殺人罪を揉み消してもらっている。しかもこの揉み消しは Camillo が Cenci の改心を教皇に保証した結果だと知って、改心するどころか尚更安心して Camillo には次の計画を打明ける事が出来ると喜ぶ。義理、後悔、恐怖という感情は全然ない。それだけに一層周囲の者は恐れ戦く。宴会の場での威嚇は正にこの様な財力と無感情の気質の現われである。祝宴が息子の死を祝う為のものであると伝えられた時一座の者は血相を変え、口々に「捕えろ」「黙らせろ」「わしがやろう」と奮い立ち、Beatrice は敢然と立ち上って父の白髪に隠れる「虐待と邪悪な憎悪」から救ってくれと嘆願するが、一言 Cenci がその復讐の恐ろしさは「王の捺印をした殺しの令状同様」であると言えば Beatrice を除く一同の者は自分の生命惜しさにただ震え上るだけである。更に続けて立ち向って来る彼女の言葉に多少心を挫かれるが、一人になって飲んでいる葡萄酒に向って「俺の血管を流れる活気に満ちた青春の決断力に、壮年の断呼たる決意に、老年の不拔、冷酷、狡猾な悪業になれ。」

(I. iii. 173—5) と無理に心をひきたてる。彼の精神力を、地上のあらゆるもののみか神をも自分の意に従わせ得る位、絶対的にしているのは、自分の呪いがきき届けられ神は常に自分の味方であるという信念である。一夜にして二人の息子を呪い殺せるとは常識で考えれば不可能に近い奇蹟であるが、Cenci は当然の事と考える。それは全人類の父なる神は人の子の父の祈りを認めるに違いないと信ずるからだ。そして「俺は人間ではなくて、いつか過ぎ去った世界の悪を懲らす^{きだめ}運命を受けている悪霊であるような気がする。」(Ⅶ. i. 160—2) とその超人的力を自認している。それ故に肉体が亡びてもその霊は永遠に存在して Beatrice を悩まし続ける。彼女は父殺しの廉による死刑直前にこの恐怖を次の様に語る。

……父はこの世でただ一人の絶対勢力であつたし、
永遠に遍在するのではありませんか。たとえ死んでいても、

父の霊は生きとし生けるものの中に棲まい、
私の身心に尚も生前と変らぬ力で破滅や
軽蔑や苦悩や絶望を起しているではありませんか。（V. iv. 68—72）

Cenci は生前、死後を通じてすべてを支配する一つの恐ろしい力の様に見える。丁度 Caesar の様に。^⑥

これに対して Beatrice は美と正義と知性の表象である。その美しさはすべてのものを麗わしくし、「Cenci の心に潜む悪霊を殺せると思える」程のものであり、しかもそれに乙女の従順さが加わっていて、父からの奇妙な虐待にも堪え、更に自分と同様に虐待を受けている弱い者（Lucretia 及び Bernardo）に対しては頑丈な壁の様な保護者となって感謝されて来た。従って高僧 Orsino と愛し合った事もあるが、自分は母や弟のために苦しまねばならぬ間はこの不幸な家を去る事が出来ないから曾ての愛も今は苦痛と変ってしまったと諦める。彼女の知性は不正や曖昧さをいち早く見抜く力を持っている。それで Orsino と結婚しない今一つの理由として Orsino には彼女に合わない「陰険で曖昧な言葉を使う血が流れている」から頼りに出来ないことを挙げる。Orsino の態度に何か彼自身の利益のために謀っているところがあると気づき今度 Cenci の虐待に関する嘆願書提出に彼が全力をあげると騙しても信じない。この様に美と正義と知性が絶妙に調和したもの、見る者すべてを楽しませた「人生の光明」が本来の Beatrice の姿である。

この美しい「人生の光明」が Cenci から、口に出して言えない 位邪悪で憎悪に満ちた行為 ‘incest’ を受けるとしばらくは苦悩のため狂乱したままその有様を母親に次の様に訴える。

美しい青空は点々と血で汚れ、
床に射す日光は黒いのです。空気は
死人が墓穴で吐き出す蒸気になります。
どうしょう！息が苦しい！黒い悪に染まるもやが
私のまわりにまつわりついてはいまわります。
……それは実質があって、重く、濃密で、
私は自分からそれをとりのけられないのです。なぜなら、それは

私の指も手足も互いにかかわでくっつけて
 私の筋肉に喰い入り、私の肉体を溶かして
 腐敗させ、こまやかで清らかな、一番奥にある
 生氣ある魂を腐らせるのです。(Ⅲ. i. 13-23)

調和した Beatrice はもう見られず、一度に暗黒に覆われ、最も清らかであった魂が腐のを感じるとその気持は不安に満ち、しかも過去の思い出は絶望ばかりで未来の見通しも勿論ない。これまでの彼女は忍耐の極限にきている。しかも嘆願書は受けられず(実際は Orsino が預って握り潰した。) このまま忍耐し続けても何の救いの道も開けない事を悟ると、従順の衣を纏っていた彼女の知性と正義はたちまちその衣を脱ぎ捨て、電光の様に恐ろしい復讐を敢行しなければならぬと奮い立つ。

やがて我に返った Beatrice は折しも来合わせた Orsino にこの出来事を伝え自ら為さねばならない復讐とはどのような形で行えばよいかを相談する。Orsino はこの Beatrice の恐怖と憤怒で激昂した心を巧みに殺意に誘い込む。他の対策としては、自殺、告訴、忍耐が考えられるが Orsino と Beatrice の問答、対話は極めて自然な形でこの中のいずれも不可能であると断定する。これが Beatrice の致命的な過ちとなる。カトリック教徒である彼等には自殺は宗教的畏怖のために不可能であり、法律に訴えても今の自分を苦しみから救えるような法律がない上却って Cenci の怒りのために一層苦しみめられると予想され、忍耐も限界であれば、今や Cenci 殺害が唯一の方法であると考えた Beatrice は、宗教家 Orsino に殺害の絶対必要性をまことしやかに説かれて、その決断を固める。そしてたとえ Orsino の言に動かされてそこにいたったものであっても最終的決断は彼女自身の知性と正義感が神に祈って「何が正しいか」を決めた結果となり、彼女は待伏の場として Petrella 城への途上道が山狭と交叉した真昼でも暗い所を指定する。この時彼女生来の美しさは影をひそめ無垢な乙女らしさはすでに汚されている。兄の Giacomo が彼女の決心を伝え聞いた時、「ベアトリーチェよ、お前は無垢の乙女のやさしさで、虫一つ踏んだことなく、生きた花を傷つけたこともなく、不必要な涙をこぼして、哀れんだものだ。美しい妹よ、これ程の美しさと知性がどうして互いに痛み合わないかと人が思った位のお前だった

のに、お前は破壊されてしまったのか。」(Ⅲ. i. 366—72)と哀れむ言葉がその事を示している。

しかしこの待伏計画は失敗し新たな計画を Orsino から聞いている Beatrice は Petrella 城へ行ってから父が自分に浴びせた恐ろしい呪詛の事を母から聞いて、父殺しが一層神聖な義務であり、その行為は「底知れぬ地獄の魂を一人の人間から撃退する」だけの事であると考え、下手人達にはこれは「気高く聖らかな仕事」であると教え、寝ている Cenci を殺し得ずに彼等が戻って来た時、恐ろしく叱り、罵り、「慈悲は却って神を侮辱するのだ」(Ⅶ. iii. 30—1)と下手人から短剣を奪って自ら赴こうとし、或は青ざめた母を見ては「何と青ざめていらしゃること。私達はしないでおけば恐ろしい罪になる事をするだけなのです。」(Ⅶ. iii. 36—8)と慰める。正義と自由のために敢えて殺害を行いその求める所は害を及ぼす者の魂であるという点で Beatrice の立場は Brutus のそれと似ている。しかし殺害後の態度を見る時「この行為の責任は何人にも負わず我々行為者が負うのです。」という Brutus の態度とは大いに異なるものが見られる。

生前の Cenci が恐ろしい毒矢を放っている間はそれから逃れる事に必死であったが、犯行が終ってその毒矢の恐怖から解放されるや、彼女の判断がある程度正常にもどり、自分の行為はこの世の法律に従えば当然罰せられることが分ってくる^⑧。その罰として課せられるであろう死刑に対する恐怖心も起る。それに対して一方彼女自身の目には依然として無罪であると思える。「私は父の死後生れた子にも増して親殺しの罪には潔白ですよ。」と言うのだから、こうして自分自身には愚かであったとは思えても決して悪い事をしたとは考えられない行為が世間では有罪であると判断される悲しみ、怒り、恐怖が交錯して殺害後の彼女の言動を狂おしくしている。先ずこの罪と呼ばれるものの恐怖から逃れるために巧みに嘘をついたり、事実を欺いたりする。運命の悪戯か殺害直後まだ下手人に報酬を与えている時に教皇使節(全く皮肉なことに彼は Cenci 逮捕の令状を持っていた)が Petrella 城を訪れ城笛が鳴ると、Beatrice は「奥へ入ってぐっすり眠っている振りをしましょう。」と言ったり、少し時間が経った時、心配する母親にたとえ嫌疑がかかってもそれを「実際に殺した人間が装えない様な何げない驚き」で欺くとか、「罪のない傲慢さ」で撥ねつけも出

来るといったり、Orsino の筆跡（示された手紙は彼女の知らないものであるが筆跡は知っている筈）を認めなかったり、法廷に引き出された下手人 Marzio の顔を知らないと言ったりする。更にこの Marzio が拷問に耐えられず遂に白状した事を聞いては恐ろしい目で「その心が痛む位」睨みつけ、「この人達は潔白です」と供述を取消させる。Camillo に向っては、優しく知性があると知られている彼がこんな茶番劇をじっと見ているのか、そしてどこかの臆病な男（Marzio のこと）を連れて来て、ひどい拷問にかけて偽りの白状を強いるのかと巧みに詰問し、遂に「彼女は物も言えない幼児同様潔白です。」と証言させてその場を逃れるにいたる。しかし共犯の Lucretia と Giacomo がもう白状してしまった事を知り、自分も今白状せねば拷問にかけると言われた時、彼女の悲しみと怒りは深刻である。その「魂の苦しみ」とは父殺ししか逃げ道のない暴虐を課されて、それから逃れる方法を講じた者をこの世の法律も、神も守ってくれない事と、自分の親族までがその様な世間との戦いをやめてしまった事に対する悲しみと怒りなのだ。次に引用する「魂の苦しみ」の裁判官への切々たる訴えは実に作者 Shelley がこの劇を通して訴えようとしているものである。

その魂は、悪がはびこって誰一人として誠実ではないこの世で、
私の親族が自分の信念に見捨てられた己自身をも偽っているのを見て、
激昂する胆汁のような涙を心の奥で流しているのです、
そして私が生きて来たこの惨めな全生涯や、
それが今惨めに終ろうとしていること、それに神もこの世も
私や私の親族には殆ど正当な裁きを示さなかったことや、
あなたが何とひどい暴虐者であり、
この人達が何と馬鹿な奴隷であるかということ、それに
圧制者と被圧制者の何と墮落した世界を私達が造ったかを考えると、
その苦しみが無理に私に答えさせるのです。私をどうなさるお積り
ですか。（Ⅴ. iii. 67—76）

裁判官を欺いてまで自分の潔白を主張した Beatrice には我々の同情心もいささか減少する様に思えるがこの心の訴えを聞いて、欺いた時でも彼

女自身の心の奥にはやはり潔白だという信念があった事を考える時、再び同情せざるを得ない。同時に、弱い「被圧制者」すべてのために戦い犠牲になった美しく勇敢な乙女に心から敬意を表すのではないか。この美しい姿は最後の場面になって一層高められるのである。Camillo 必死の教皇への嘆願も甲斐なく死刑判決書と執行令状を出されて狂乱し、「こんなに若くして、神秘的な、冷たい、腐敗させる、蛆虫の住む地下に行かねばならないとは！」と悲しむが、すぐに冷静になり本来の優しく美しい姿に戻るのである。即ち処刑の前に、あとに一人とり残される弟に対して「今と同様にやさしい気持ちで私達の悲しい運命を考えて下さい。……性急な絶望に迷い込まずに涙を流して耐え忍んで下さい。」(V. iv. 141—5)と、そして最後まで頑張ってくれた Camillo にはもう「無用の御苦勞をなさいませんように」と言い、母には帯を結び髪を整えてくれと頼み、自分も母の髪を整えて、役人につきり用意が出来たと告げてこの劇は終る。

Cenci は「悪」の代表であると同時に「圧制者」の代表であり Beatrice は「善」と「美」の代表であると同時に「被圧制者」の代表であって、この劇の主題はこの二つの力の戦いである。これは *The Revolt of Islam* に於ける「圧制君主」対 Laon の戦い、*Prometheus Unbound* に於ける Jupiter 対 Prometheus の戦い等と同様 Shelley が好んで扱った主題である。‘incest’ は昔から多くの作家によって扱われているが、この劇ではその動機が肉慾ではなくて善と美に対する憎悪に起因する。しかもこの憎悪は Beatrice 個人に止まらず天界、地上のすべての善と美に向けられ、それを破壊することそのものを目的とする。この悪魔的性格が Cenci の持つ悲劇的要素である。これに彼の絶対的な力が加わって彼を一層悲劇的にしている。彼の力を絶対的にしているものには財力とか知力という彼自身の力と、被圧制者の無力の他に法律と神の力がある。無力の被圧制者の中で Beatrice は圧制者と戦う義務を感じて全力を尽くす。そして圧制者征服の手段である殺害はあくまで神から命じられた義務であって、これを行わないことこそ罪になると考える彼女は最後まで法律と神の救いを信じているが、法律も神もこの美しく勇敢な犠牲者を救わないのだ。Shelley はこの二つの力、法律と神が事ごとに圧制者に味方し被圧制者を救わないことを示している。教皇(法律の最高責任者として)が Cenci に味方する理由は教会の経済力と権力を維持するためである。殺

人を犯してもその財宝を提供させて許してやり、その様なことが一二度あれば教会は肥えるため、教皇はこの「黄金という悪魔」に正しい裁きの力を奪われている。又一家の家長である Cenci の立場は一国の最高権威者である教皇の立場に似ている。教皇は最高の父権と考えられる。従って父の罪惡を訴える嘆願を受け容れれば父権を弱めることになるから教皇が投げ捨てるのは当然であり、父を殺した Beatrice 達の赦免を乞う嘆願を「親殺しの罪には特に厳しくしなければならない」と冷酷に撥ねつけたのは教皇自身が己れの座を失うことを恐れたからだ。又神はこの邪惡な圧制者の呪いを聞き届け、更に Cenci が祈り殺した息子の一人はミサをあげている最中に教会が倒れて死んだという全く不可解であり皮肉な事件を起しておきながら、一方被圧制者には何の救いも恩恵も与えないことになっている。悲劇のもとになったこうした法律や教会勢力や神に関する描写で Shelley は当時の墮落した宗教や法律を攻撃しようとしているのである。

一方 Beatrice にも一つの誤りがある事を物語っている。言うまでもなく圧制者征服に殺害を以てしたことだ。Shelley は Preface で言っている。「どんな人間も他人の行動によって真に恥しめられるものではない。だから最も極惡な侮辱に対してさえ為すべき適当な返報は親切と寛容であり加害者を和睦と愛によってその暗い激情から改心させようという決断である。復讐、報復、贖いは致命的誤りである。」と。Beatrice は「愛」によって Cenci を征服すべきであったがそうしなかったが故に悲劇的人物となったのだ。

この善惡二勢力の争いの中に入ってこの悲劇の発展に非常に重要な役割を果たすものに Orsino が居る。彼は狡猾の塊で己の利益のためにはどんな事でもやりかねない人間である。「他人が織りなす何か善惡入り混った陰謀を利用して、俺独特の目的を達成しよう」(V.i. 77-81)とする Orsino の存在は矢野教授の言われるように *Othello* に於ける Iago 的存在であると思う^⑨。彼は Beatrice を非常に愛して「彼女の美しい姿が祭壇の前では俺の横で跪き、人が集まるところへまでもそのあとを追う」気も狂おしくなる位だ。Beatrice から預った嘆願書は教皇に出さないままにする。嘆願書を出せば教皇は彼女を救う方法として彼女を教皇の選んだ男と結婚させるかも知れない。そうすれば Orsino が彼女を手に入る望みは消えるからだ。更に彼女を手に入れるためには Cenci が邪魔

になる。この時都合よく Giacomo が Cenci に苦しみられ、嘆願書も受理されないならば自殺するか Cenci 殺害のいずれかしが道がないと考えていることを敏感に感じ取って、それを利用して彼を殺害に誘い込む。更に Beatrice も暴虐を受けて Cenci 殺害の必要性を感じていると見てとるや「罪惡を勝ち誇らせ」ておけばその反覆によって彼女自身完全に墮落してしまうし、彼女には復讐の義務があることを巧みに説き、更にその行為の為に罰せられることを恐れる Lucretia に、いかにも宗教家らしく「虐待があるところには救いがあるということだけを信じなさい。そして救いを掴むために十分勇気を出しましょう。」(Ⅲ. i. 193—5)と口から出まかせを言って安心させ、手先に使う二人の暴漢を推す。こうして Orsino は持合わせもしない同情心を装って自分の計画を着々と完全なものにする。

彼が邪惡なことを行う時、自分は表面に出ずに人を自分の意のままに操って罪はすべて人に着せるというやり方をする。彼の計画は実に綿密で、犯行が万一発覚する場合に備えて、弁明の仕方や隠れ家等を考えてからでなければ計画を実行に移しはしない。Cenci 殺害の待伏計画が失敗すると直ちに第二次の計画を立て、Petrella 城にいる Beatrice 宛の手紙に Giacomo の要望により二人の男を遣わすと認めたため、結局この手紙があとから Marzio のポケットから発見され Giacomo や Beatrice が Cenci 殺害に直接関係していることが明らかになる。この殺害事件は折しも Cenci を逮捕に來た教皇使節によって発見され Orsino の陰謀は失敗に帰す。こうなればあと Orsino に残された仕事は自分一人が逃げるだけなのだ。彼の館を訪れた Giacomo に正体を見抜かれ「お前は嘘の塊だ。裏切者の殺害者、臆病者の奴隷奴、だがもう言うまい。剣を抜け。」(Ⅴ. i. 52—5)と迫られるが助けてやると巧みに騙して自分を逮捕しに來ている衛兵の待っている方へ行かせ自分は卑しい身なりに変装して物事を外観だけで誤って判断する群衆の中を逃れる。しかし Orsino にも良心はあるようだ。こうして他人から逃れはしても自分の「心の中にある侮蔑心」、「自分自身の非難」を逃れることは出来ない。「今俺があらゆる他人の目から隠れ回っている様に自分自身から俺を隠す変装はどこで見つければよいのか。」(Ⅴ. i. 103—4)と悩む。この悩みはこの劇の初めに Beatrice が Orsino の正体を見抜いて鋭く彼を睨みつけた時、

「そのまなざしの光は俺の神経を一筋々々解剖し、俺を裸にし、俺に、心に秘めた考えを悟り、赤面させるのだ。」(I. ii. 85—7)と告白した恐怖と同種のものである。この様に Orsino は宗教界の代表でありながら光明を恐れる人物である。これによって Shelley は墮落した宗教界や、聖なる名に隠れた罪惡を非難し風刺していることは勿論である。

以上説明した三人物、Cenci, Beatrice, Orsino はそれぞれの信念をもってそれぞれの目的に向って前進する。その目的が三人三様であるにも拘らず、その目的達成の過程で起る事件や言動は悉く一つの恐るべき結末へ向って進行する。しかもそれ等の人物は Shelley が描いた人物として独特のものでその性格の発展が悲劇を結末へ導いている。この劇で Shelley は教皇、父権、僧侶、裁判官、友人、慣習、法律、神等あらゆる美名に隠れた害惡、その様な害惡に満ちた社会、その中にあってそれ等の害惡に押えられて無力な者達を暴露して、反省を求め、それ等の害惡と戦った Beatrice についてはその手段の誤りを責めながらも、その雄々しく戦った美しさを讃えている。忌わしい多くの害惡を見て怒りや同情に満ちた心持で最後の部分を読む時、我々は何か胸に迫るものを感じる。死を前にして依然自分の行為が正しかったことを信ずる崇高な心持、下手人に前言を翻させる程堅い潔白への確信、母達に牢獄で聞かせる哀しい別れの歌、か弱い母親へのいたわりが優雅でしかも力強い女性の理想像を作りあげ、読む者の心を美しく浄化してくれるような気がする^①。そしてつい先程まで見た忌わしい事件や感情が美しいヴェールの向うにぼんやりと見えるに過ぎないような気がする。Leigh Hunt が Shelley への手紙で次の様に書いているのはこの様な気持を現わしたものではないかと思う^②。即ち「シェリィ君、君は何と気高い本をくれたんだろう。詩と哲学と人間性と恐怖とあらゆるものを救う意図の美しさとが何と誠実に品位あり、情愛深く織り混ぜられたものだろう。いわば嵐の後に四月の小川のように歌う仄かな余韻がこの作品全体に流れているからだ。」と。Shelley 独特の善惡の戦いという主題を悲劇の中に織り込み、この様な理想的な美しさ(空想的ではなくて)を作り出している所にこの作品の価値があると言える。

〔註〕

- ①. Newman Ivey White; *Shelley*, 1947, vol. I. P.194. 及び,

- F. L. Jones; *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, 1964, vol. I. P.190 参照.
- ②. White; *op. cit.* P.195.
- ③. *ibidem* 及び,
Oscar James Campbel; *Poetry and Criticism of Romantic Movement*, 1932, P.828 参照.
- ④. Shelley はこの劇を, Miss O'Neill を Beatrice に Mr. Kean を Count Cenci にして Covent Garden で上演することを切に望んだが断られ, 結局1886年まで上演されなかった. Shelley 自身は上演のことを念頭に置いて執筆したが, それでも上演上都合の悪い点が多いからだ. それは彼が観劇を余り好まず演劇に通じていなかった結果と考えられる.
- ⑤. Desmond King-Hele; *Shelley His Thought and Work*, 1960, P.126—7.
- ⑥. Jones; *op. cit.* Letter No.505.
- ⑦. *The Cenci* の Shakespeare 劇との類似点については, King-Hele; *op. cit.* PP.127—30, 37—8. 及び, F. R. Leavis; *Revaluation*, 1962, PP.224—6 参照.
- ⑧. King-Hele; *op. cit.* PP.131—2 参照.
- ⑨. 矢野禾積著「シェリィ」(研究社英米文学評伝叢書) p.116.
- ⑩. J. A. Symonds; *Shelley*, 1907, PP.127—8 参照.
- ⑪. Jones; *op. cit.* Letter No.563. note.

終り.